

## 37 晋代から宋代における「七死脈」の成立

木場 由衣登

日本鍼灸研究会

中国医学の診断学において脈診の役割は古来より格別に大きい。その中でも、脈状による脈診（浮・沈・

遲・数などの表現による脈状診）は現在も馴染み深いものであり、現行する伝統医学の中でも揺るぎなき存在感を醸し出している。しかし、脈診における脈の表現全てが実用的な段階に在る訳ではなく、今回挙げるような「七死脈」のように記載する医書は多いが、反面、その言葉の示す意味が難解で、実践の対象とし難い脈状もある。ここでいう死脈とは「①屋漏・②雀

啄・③彈石・④解索・⑤蝦游・⑥魚翔・⑦釜沸」の七つの脈状である。（各脈状に任意で番号を付す。これらの名称がよく知られているのは、『脈法手引草』などの影響が大きいと思われる。）これら「七死脈」の概念を

脈診という技術的な実用に努めれば、「死」という状況の苦しさもあり難しく、臨床的にのみ死脈を語るのもまた誤りの原因となりかねない。臨床的技術としての具体性が風化したのだと単純に考えるも良いが、むしろそれぞれの死脈という脈状が、一体何を意味しているかということとその成立過程から把握し、死脈の意味を理論的に再構築することが死脈を学ぶ方法としては妥当と考えられる。

よって、今一度、「七死脈」の概念がどのようにに成立したのかを顧み、死の脈状がそれぞれ意味するところを考察したい。

先に挙げた死脈の脈状が医書中に現れるのは王叔和の『脈経』からであり、卷五・扁鵲診反逆死脈要訣第五には次のように記載される。「扁鵲曰、夫相死脈之氣、如羣鳥之聚、一馬之馭系水交馳之状、如懸石之落。出筋之上、藏筋之下、堅閔之裏、不在榮衛、伺候交射、不可知也。脈病人不病、脈来如①屋漏、②雀啄者死。数而疾、絶止復頓来也。又経言、得病七八日、脈如①屋漏、②雀啄者死。脈来如③彈石、去如④解索者死。

脈困、病人脈如⑤蝦之游、如⑥魚之翔者死。脈如懸薄卷索者死。脈如転豆者死。脈如偃刀者死。脈涌涌不去者死。脈忽去忽来、暫止復来者死。脈中侈者死。脈分絶者死。」

これらは唐代の『千金方』にも引用され、敦煌文書の『玄感脈経』になると「如①屋漏、漏者、絶一止、時時起而不故連是。如②雀啄、雀啄者、頓来甚数、而如魚是也。如③彈石、彈石者、劈劈急也。如④解索、動数而隨散乱、無復次結是也。如⑤蝦游、蝦游者、再再起而還退没、不知所在、又久乃復起、復起輒遲而復去速是也。如⑥魚翔者、魚不行而掉尾、動身竦而位久也…」とあり、ここで『脈経』中の脈状表現が現在よく知られる死脈の名称として認識されていることが分かる。しかし、まだ①～⑥のみであり、ここに⑦「釜沸」の記載は見られない。

では、⑦「釜沸」が初見するのがいつかといえ、それは『脈経』巻四・診三部脈虚実决死生第八である。ここには三部に現れる脈状により死生を判別する内容が記載される。これらには「如銀釵股」、「如羹上肥」、

「如蜘蛛絲」、「霹靂」、「如弓弦」、「累累如貫珠」、「如水淹然流」、「如①屋漏」、「如②雀啄」、「如⑦釜中湯沸」という特徴的な脈状表現が多数あるが、現在馴染み深いものは②③⑦のみである。ここから、後世に「七死脈」となる七つの脈状表現は『脈経』に揃っていることが分かる。しかし、『玄感脈経』以降、七つの死脈が纏まって記載されるのは『脈粹』（宋蕭世基）になってからであり、その後『察病指南』（宋施発）になって漸く「七死脈」と題した内容が記載されるようになった。次に「七死脈」それぞれがどのような病態を示すかであるが、それは五臓との関連性がで表現される場合が多い。『脈粹』ではそれぞれ①心肺、②心気、③肺気、④五臓、⑤脾胃、⑥腎気を対応させている。他に『脈訣理玄秘要』（宋劉開）も『脈経』の内容を受けた独自の記載がある。凡そ「七死脈」の成立には『脈経』、『玄感脈経』、『脈粹』、『察病指南』という流れが見られ、その後もこれらの内容を踏まえたものが多い。